

アメリカにおけるロマンス・コミックスの変遷

小野 耕世

女性向けコミックブックの登場

「ぼくの絵のモデルをしている女性のひとりは、ロマンスもののコミックブックが大好きで、旅行するときはそれを束にして持って行って、飛行機のなかで読むんだよ」

そう私に語ったのは、プエルトリコ出身のファッション・イラストレイターのアントニオ・ロペス(Antonio Lopez)だった。彼と初めて会ったのは、1975年5月のニューヨーク、アンディ・ウォーホルのスタジオで催されたパーティに顔を出したときである(ウォーホルには、彼がその前年来日したとき、私は長いインタビューをしていた)。

アントニオとは、その後ニューヨークや東京でしばしば会うようになったが、彼がロマンス・コミックスが好きなファッション・モデルの話をしてくれた1970年代には、実はアメリカでは、ロマンス・コミックスの衰退が、すでに始まっていたのである。

ロマンス・コミックスにさきがけて、ロマンス・アートがあったのは、日本で少女マンガより前に落谷虹児などによる少女雑誌のイラストレーションがあったのと同様だが、そのアメリカでの早い例として、ローズ・オニールによるキューピーの絵がある。1970年代に『現代詩手帖』という雑誌に『アメリカ博物考』と題するエッセイを連載していた私は、そのなかで彼女のキューピー画をとりあげている。また、そうした絵をつけたロマンス小説は、アメリカでは1930-40年代にかけて、パルプ・マガジンのなかで人気があった。しかしパルプは、第二次世界大戦後に急速に衰え、それに代ってロマンス・ストーリーは、コミックブックの分野に舞台を移したのだった。

アメリカにおけるロマンスものの物語マンガは、19世紀の末に始まった新聞連載マンガの歴史のなかで1930年代から登場し、有名なものではデイル・メシック作の『ブレンダ・スター』という女性記者を主人公にしたものや、デイル・アレン(Dale Allen)の『メリー・ワース』(Mary Worth)があり、これは女優や女性画家などに親かなアドバイスをする人生経験豊かなおばさんを主人公にした一種の人生相談マンガだった。

新聞連載マンガではなく、雑誌形式のラブストーリー専門のコミックブックは、1947年の夏にクレストウッド社から出た『ヤング・ロマンス』(Young Romance)が最初で、その年の末まで類似誌は出ていない。ところが翌48年には、『スウィート・ハーツ』(Sweet Hearts)、『マイ・ロマンス』(My Romance)、『マイ・ライフ』(My Life)の三誌が続き、49年の末には125誌、そして1950年には26の出版社から計148誌ものラブ・ストーリー専門のコミックブックがニュース・スタンドに並ぶようになったのである。

なぜとつぜん、ロマンスもののコミックブックのブームが来たのか?それ

にはアメリカ独自のマンガの出版形態であるコミックブックの歴史に触れなくてはならない。コミックブックは、1930年代初めに、新聞連載マンガをカラーで再録した雑誌として生まれたが、やがて描きおろしのオリジナル作品も含むようになった。

1938年にスーパーマン、続いて翌年バットマンが登場すると、スーパーヒーローもののブームとなり、コミックブックの部数は急増、一大出版ビジネスとなる。第二次大戦中はスーパーヒーローたちはナチスや日本軍と戦う。この期間、男性のアーティストたちが徴兵されたので女性の画家たちもコミックブックの仕事をし、独得なヒロインたちを生み出したことも特記しておかなくてはならない。

戦争が終わると、スーパーヒーローものと共に、コミックブックの中心となったのは、犯罪や怪奇ホラーを描くコミックスで、血まみれの残酷描写がページあふれた。これは戦後アメリカの社会不安を反映していたが、かつて低俗なパルプ雑誌が教育関係者などから批判の対象にされたとき以上に激しくコミックブックは批判的となった。新聞や婦人雑誌などメディアによる集中攻撃は、小学校などで犯罪・暴力のコミックブックが焼かれる焚書運動にまで発展した(このときスーパーマンやバットマンのコミックブックも焼かれたのである)。俗悪コミックス撲滅運動が起きたのだった。

かくして1950年には、犯罪コミックスを出していた業者は次つぎと犯罪ものからラブ・ストーリーもののコミックブックへと路線変更を余儀なくされていった(同時に、『三銃士』や『宝島』など世界名作文芸のコミックブック・シリーズも登場し、これも教育者や子どもの親たちの支持を受け成功するのだが、ここでは触れない)。

こうしてさかんになったロマンスもののコミックブックには、いくつかの定型があった。当初一冊の内容48ページで10セントだったころは、コミックスの短編5編が収められていたが、1冊32ページ(広告を含む)になり、7ページの短編三つを載せるようになる。いずれも読切りで、主人公はミドルクラスの女性(特に金持ちでも貧しくもない)が理想の男性を求め、デートをして他の女性も加わり…など登場する男女の職業もさまざまで、キャビン・アテンダントや医者、もちろん髪の色もさまざまだが、1950年には黒人が主人公のロマンスものが初めて登場した。

基本的に物語は女性の一人称で語られ、恋のかけひきやさやあても多少あるが、最後はふたりは(誤解も溶けて)結ばれる—という結末は、読んでいてすぐ予測がつく。だが逆にこの健全なパターンが好むしく、私は50年代からロマンスもののコミックブックを読んできたが、安心して楽しめた。アントニオ・ロペスのファッション・モデルにとっても、そのメロドラマにひたる快感のため、時間つぶしにはもってこいの娯楽だったのでは

ないか。絵がきれいなソープ・オペラなのだ。

またどのロマンスもののコミックブックにも、身の上相談のページがある。読者対象はティーンエイジャーから20歳代の女性だが、10歳から17歳の層もあり、かなりはば広い。読者からの恋の悩みの相談(好きな男の人がいますが、彼が近づくと口がきけないのです。どうしたら?など)には、女性の専門家の名で解答が載る。しかし実はその返事の筆者はみな男性であり、いやロマンス・コミックスの原作も絵も、まずほとんど男性によって手がけられているのだった。

また、スーパーヒーローもののコミックスにも女性読者を想定したシリーズも出た。『スーパーマン』や『バットマン』の出版社であるDCコミックスでは1958年『スーパーマンのガールフレンド、ロイス・レイン』(Superman's Girl Friend Lois Lane)というシリーズも刊行するが、そのなかで女性新聞記者ロイスの服装やヘアスタイルに読者のアイデアを募集し、それをマンガのなかに生かしていたし、着せかえ人形のようなロイスのファッションのページもあった。

例えばその1968年2月号には「ロイスの新しい髪型はとでもすてき!私もこれからロイスと同じヘアスタイルにするわ」という読者からの手紙が載っている。

ロマンス・コミックスの変化

1960年代から70年代にかけて、ロマンス・コミックスに変化が起きる。60年代末にはカリフォルニアを中心にアンダーグラウンド・コミックスが胎頭し、その作者たちのなかの少数の女性マンガ家のなかに、トリナ・ロビンズもいた。ヒッピーの登場である。70年代には、アリシア・ベイ・ローレル(Alicia Bay Lorell)というイラストレーターが『地球の上に生きる』(Living on the Earth)というマンガ的なイラスト集を出して人気を呼び、その日本語版も刊行され、来日した彼女に私は会った。またアンダーグラウンド・コミックスの旗手とされたロバート・クラム(Robert Crumb)はガールフレンドと共に全ページカラーの美しいファンタジー『ヤムヤム・ブック』(Yum Yum Book)を出した。

50年代の男女関係のモラルに基づいていたロマンス・コミックスも、

時代に合わなくなってきて、ヒッピーやオートバイに乗る若者なども登場するようになる。ポップアートやキネティック・アートが話題になると、表紙のデザインにサイケデリックな雰囲気をとりにいれたりしていることに私は注目したが、読者離れをくいとめることはできなかった。

コミックブック業界にも変化があり、1978年にカリフォルニアに出来たイクリプス・コミックス(Eclipse Comics)では、日本の白土三平による『カムイ外伝』(Kamui Story)や池上僚一の『舞』(The Psychic Girl Mai)などを出版したが、80年代にはトリナ・ロビンズによる『カリフォルニア・ガールズ』のシリーズを出した。マックス(Max)とモー(Mo)という双子の高校女性が主人公の白黒印刷のこのマンガには、黒人や東洋人の女性たちも登場し、ハワイ旅行の物語もあった。このトリナのコミックスでも、登場人物の服装やヘアスタイルには読者のアイデアが採用され、考案者の名がその画面ごとに記されている。明かるく陽気なマンガだ。

大手出版者のロマンス・コミックスで最も長命なのはDCから出ていた『ヤング・ラブ』(Young Love)で、1976年まで続いた。現在、それらのコミックブックは復刻版が出てもいるほか、スパイダーマンのガールフレンド、を主人公にした『スパイダーマンはメリー・ジェインを愛する』(Spider-Man Loves Mary Jane)が、日本のマンガに近いスタイルで、女性向けに出た。女性マンガ家が少なかったアメリカにも、いま、日本の少女マンガの刺激を受けた女性による作品や、自分の体験をつづった<自伝マンガ>の秀作も生まれつつある。

ロマンス・コミックスについて私に語ったアントニオ・ロペスはエイズで亡くなり、アンディ・ウォーホルもすでに故人だ。私はいま、アメリカ50年代の文化状況(ロマンス・コミックスの登場も含む)についての記録研究書、デヴィッド・ハデュー(David Hajdu)著『害毒コミック撲滅!』(The Ten-Cent Plague)の翻訳を進めているところである。

